

コメン ト 3

松 井 春 満 先生（奈良大学教授）

松井でございます。実は私コメンテーターとなっておりますが、コメンテーターとは一体何をしたらよいかわからなかったものですから、数日前に岡田先生にお電話したんです。「学会の指定討論者のようなものか」と聞きましたら、「いやあ、それよりも積極的に提言することがあったら提言してください」というお話でした。レジュメもでますよ、ということをおっしゃったものですから、昨日実は慌てて、思い浮かぶままを、そこにお配りしたような形で作ったわけです。したがって読んでいただければ、私が何を言いたいか、この短い10分間よりもわかっているんじゃないか、というように思います。

今の大学改革が、大学院重点化ということもありますけれども、教育の改革、大学「教育」の改革ということが、やはりメインになって進められているということは、私もすでに痛感してまいりました。大学に入ってくる学生達が、大衆化して今までとは非常に変わってきているんだと言われること、これはよくわかるわけですね。ただ、いろいろなところで指摘されることが、どちらかというと、大学に責任がありますよと、大学の教師の問題とされている。例えばそこに書きましたのは、些細な例ですが、このごろの学生達に私語が多いということ、大学の教師が悪いんだ、内容も悪いし、教え方も悪いというようなことで、だいたい大学の教師の方に責任がかけられてくる。そういうこともあるとは思いますが、ただ私は、その議論の中にあるのが、学生の現状というものを一応前提にして、その上で、それに合わせなさいというような類のものがどうも多いんじゃないだろうか、という気がしております。それではちょっと片手落ちじゃないかということを思うわけです。

レジュメの2ページ目に自分の経験を述べてみました。非常に古い、私が学生の時の経験です。ですが、たとえそうであっても人生の途上では、あるいは一般化できる問題じゃないだろうかというように思って書きました。簡単に申しますと、私は在学中病気をしたわけです。2年半。その前と後で、私自身の人間像というか学生としての在り方というか、それが180度変わったようなところがあるのです。その前はたいへん不真面目な学生でした。ところが病気の間に、私はそれ迄つまらないと思っていた講義を非常に聞きたくなった。というようなことで、復学いたしましたからは、まことに真面目な学生になりました。そこで思いましたのは、つまり私の心の構え方 *Haltung* が違ってきたということです。病気をはさみましてね。講義がつまらないというより、つまらないと思う私の心理に問題があったわけです。しかしこれは私だけのことでなくて、哲学的にも心理学的にも指摘される問題ですけども、*Haltung* が違ってきますともの見方が変わってくるわけです。同じ対象に対しても新しい *intention* が起こってくる。*intention* が起こると、今までつまらないと思って見えなかったものの価値が見えてくると、そういうところがあるんですね。ですから、やはり問題は、学生層が非常に変わってきたといたしましても、それに合わせるだけじゃなくて、私の申し上げる、そういう *Haltung* と申しましょうか、心の構えというものをどのようにして学生の中に喚起していくかということが、非常に大事じゃないかと思います。そのことをひとつ思うわけでございます。

それから、何より大事なものは、今日のテーマにもあります、どういう人間形成を目指すかということですが、それについても2ページに書いておりますように、今までもずいぶん言われてきております。いろいろな角度から言われておりますが、私があえて申し上げたいのは、いろいろな人間を形成するという、そういう姿に、共有されるようなところのもの、その理念ともいえるべきものにまでは、どうも大学人の認識は至っていないのではないだろうかということです。その点で私は、岡田先生が報告された基調提案にありましたことには、基本的に非常に共感しているわけです。一昨日、第1回のフォーラムの記録をいただきまして、見せていただきました。その中で *geo-catastrophe*、今日もおっしゃいましたですね、*psycho-catastrophe* ともいえるべき、そういう問題が現代の時代の中に起こっている。地球が破局に陥ろうとし、人間の魂といえましょうか、そういうものが破局に陥ろうとしている時代じゃないかと。こういう提言を私も本当にそのとおりで思っておるわけです。したがって、岡田先生がおっしゃることは非常によくわかります。

それに関連してくるような問題で、若干末梢的に思われるかもしれませんが、オウム事件を聞いておまして、

先ほどもありましたように、非常に高学歴の人がここに入っていること。私はそれは他人事じゃないなと思ってんです。与えられた課題に黙々と従っていくという、この生き方は、日本の大学の中の、特に自然科学系の人たちの、研究室にはずいぶんある姿じゃないかと思います。つまり教授から課題を与えられて、文句があってもそれをやりなさいと、やらなかったら市民権はありませんよという空気が、自然科学系にかなり強いということは、私の身近に自然科学系の間もおりますので、感じておるわけです。それとあまり変わらないような状態が、オウムの中にうかがわれました。考えてみますと、これは大学以前の、いわゆる受験体制下の中等教育の学校の中でもあることです。やはり有無を言わず与えられた課題といひましようか、なすべきとされる課題をやっていかなかったら、大学に受からないんだということで黙々とやってきた。そういう学生が大学に入ってくるわけですね。

今いわゆる「一般教育、教養教育の改善」という大学審議会の方針で、ご承知のように、その結果どうなったかという、教養の在り方、教員の組織や制度を見直すという名前のもとで、実際進んだのは「教養部の解体」です。それから一般教育の削減と、そして専門に吸収していくというような形で進みました。今までも教養の在り方というか、一般教育の在り方に問題があったわけですが、実は現在ますますそうになっていると思うんです。ですから、先ほど寺崎先生がご提案になりました「制度から運動へ」ということ、それは確かにそうだろうとは思いますが、教養の在り方が、運動へと言いつつ実は運動になってないんじゃないだろうかと、そういうことを本当に切に思います。

そこで、私はもうひとつ、3ページ目に書いておりますように、「脳死判定、臓器移植」、生命科学、DNAの交換、遺伝子交換の問題等につきまして、若干の発言をしてきた経験もあるのですが、そういうときに私が申し上げてきたのは、どうも人間の現在の科学の発想の仕方の中にずいぶん問題が生じていると思えることです。ものの考え方自身にです。狭い科学の立場からだけ考える、いわゆる科学による越権行為、越境行為というものが、ずいぶん最近あるんじゃないだろうかと思います。そういうことを中心にしまして、この生きている人間の、形而上学的次元に踏み込んで大きな問題が起こっているというように思うわけです。そこで、現在の大学改革の中で、一方で大学院の重点化計画というようなことが言われますけれども、いわゆる「研究の高度化」という課題の中でも、そのものの考え方において、岡田先生のおっしゃる geo-catastrophe、psycho-catastrophe ということ、本当にそのことを考えていくかどうかという問題が、やっぱりあるだろうと思うわけです。

それから先ほどの学生の在り方、教育方法の改善という問題に関係いたしますが、確かに教育方法として改善すべき問題はあるだろうと思います。そのための試みがいろいろとなされていることも存じておりますが、ただ私が思いますのに、どういう教育方法であっても、大学において教師がなす教育というのは、全部研究の裏付けを持っております。教養教育だけが研究と切り離された問題だということではないんですね。研究の裏付けがある。そうすると、その研究の次元で一体我々が、大学の教師が何を考えているかということが、やっぱり問題になってきます。

そこで4ページの10行目のあたりに書いておりますが、一人一人の研究者なり、教師なりの発想の一番底辺の部分でどういう思想がそこにあるか。そういう問題がやっぱりあるだろうと思います。どんな思想があったっていいじゃないかと言いましたら、それはオウムだっていいじゃないかということになってしまうので、そのところがたいへん問題だと思います。

その点で、この大学の変遷を非常に大ざっぱに申しますと、現在は大きな大学では古典的な University から Multi-Versity へ変化した大学とか、Multi にもならない、Multi の一端を編成したというような大学もたくさんありますし、高等教育機関として考えましたら、大学の他にも専修学校とかいろいろとございます。ですが大きな変化としては、一般的には University から、いわゆる Multi-Versity へ変化してきたと、こういうように言われます。かつての University の場合には、まさに古典的な、いわゆる学問の宇宙としての統一を目指しておったということがございます。

では Multi になってどうなのか。Multi になったら、あちこちの部門、研究部門、教育部門、あるいは管理の部門、いろいろなところが、しかも連合体をつくって大学を構成しているということですが、ではバラバラか、バラバラであっていいのかといえば、やはりそうじゃないだろうと。つまり integrate していくものがあるわけです。そうでなければならぬわけですね。では、その integrate する原理というものをどこに求めるのかということが、私が申し上げるいわゆる思想の次元という問題になります。そこで4ページのまん中に書いておりますように、それはいわゆる人間の尊厳性を尊重する、あるいは、Human Rights と書きます。これは人権ですけれども、言葉どお

りだと「人間の正しさ」なんですね、公正さといひましようか、人間の正義ということだす。そういうものについて模索する。あるいは Humanity の原理。さらには人間の営みについての批判的な吟味というやうな問題、これを広く人間的、Humanistic なモラルというやうに考えますならば、そういうモラルによる統一というものが、やはり今日の大学の一番基本のところ、目に見えなくてもそれが置かれるべきだろとうと思ひます。

先ほど自然科学系と申し上げましたが、実は自然科学だけじゃなくて人文や社会の方でも、いわゆる実験的な講座の中には似たやうなところがございます。これらの科学研究もそのモラルを踏み外さないということ。少なくともそれは Regulativ な統制的な原理としては働くはずだと、こう思ひます。その上で、岡田先生のおっしゃる「人類益」を目指す研究なり教育なりが進められていくべきだと。

こう考えてみますと、それはいわゆる Multi な University だけではなくて、どうひう高等教育機関であっても、その原理は通用すべきものと考えられるだろとう、こう思ひます。

それがあひますと、やはりそれは教育の営みというものに反映されてくるだろとうと思ひます。研究の営みにはもちろんでございます。いわゆる研究者がやみくもに突っ走る。これは私は生命科学の問題などを世の中で見ておりまして、非常に感じていることだす。やみくもに突っ走っていく。このモラルはそういうやうなことに對しての制御力にもなってくるし、学生にそういう制御力というものを教えていくことができる。ものの考え方、認識の仕方というものを教えていける。そして人間の営為である限りは、常に問題の考え方は複数 Plural なんだぞと。先ほど正解はひとつだという考え方に批判的なお話もございましたけれども、まさに正解はひとつというやうなものではないんだぞということをは学ばせる、そういう工夫がさらになされていっていいんじゃないかと、それが非常に大事じゃないかと、こう思ひます。

それから一番最後に書きましたこと、それは、何を空理空論を言うかと言われそうなことなんだすけれども、時間がございますので簡単に申し上げますが、私は現在業績主義というものが非常に進みすぎていると思ひています。今日の話を聞いておりまして、やっぱり基本に何となくそういう時代状況で、縁取ったやうな考え方が示されているやうに思ひんですがね。業績主義の底に競争主義があひます。いわゆる国際的な競争の舞台の中でどうしていくのか、というやうな問題に迫られていると。

でも私はなぜ競争しなければいけないのかと疑問をもちます。自然科学系ではもう寸刻を争って競争している。ですから、極端な場合には、自分のやっていることについては、ちょっと他には言わない。秘密にしておくとかね。そういうやうなことさえあひます。なぜそんなことをするのか。これはやっぱり先取りされては困るから。考えてみたら私はおかしいと思ひんです。本当に人類のための学問をやっているんだったら、何も急ぐことはないし、競争することはない。そうすると競争というのは非常に主観的な、まあそれだけかどうかは知りませんが、名前のために、あるいは何らかの特殊な利益のためにやっているのかというやうなことになってくる。そういうことがそのまま黙認されている、それどころかむしろ奨励されていることが、先ほどの「破局」といったことにもつながってきているんじゃないだろとうと、こう思ひます。

ですから、非常に乱暴な提案といひましようか、空論になりそうなのは、そこに書いておりますやうに、論文というものは無名、匿名でよい。本当に人類のための学問をやるんだたらですよ。だいたい教師の仕事は匿名だす。それからお医者さんの仕事も、臨床医は匿名だす。どんなに優れた臨床行為をやっておりまして、人づてに名前を聞いて名医だなあというだけであって、その臨床的実践というものが、業績になるということはないんですね。職人だつて、技師だつて、大体おおむねはそうです。

私は、専ら個性的な仕事の芸術や文学は名前が入って良いと思ひます。ところが客観的に人類のための仕事をしているはずの大学の研究者も、名前をここにあらわす。どうもおかしいんじゃないだろとうと考えますと、論文は無記名、匿名だ。しかしそこに書きましたやうに、書いたことに責任をもつためにきちっとそれは管理される、登録もされる。論争や引用などで必要な時には、名前が出てくる。しかし一般的には知られていないと。そういうやうなことを将来は検討してもいいんじゃないか。本当に学問をしたい人はそれでもやります。それでよいのではないか。

そうでないと、現在の世界的に進行しているこの「破局」という方向は、救えないんじゃないだろとうか。そういう思い切った国際的な合意が、何らかの形で必要じゃないか、こういうちょっと空理空論に属するやうなことも、最後に申し上げたいと思ひたわけでございます。

その他の議論

（梶田教授）

これで私どもの方で準備させていただきました先生方のプレゼンテーションを一応終えまして、フロアーの方からお話を出していただきたいと思います。その皮切といたしまして、私どものセンターの田中先生の方からご発言をお願いしたいと思います。

（田中教授）

皮切をさせていただきます。非常に貴重な議論をお聞きしたと思っています。

実はここに掲げてあります「これからの大学はどのような人間の育成を目指すか」という題は、私どものセンターにとりまして非常に重要な問題です。と申しますのは、例えば同じ京都大学を取り上げましても、医学部と文学部では全く事情が違いますから、教育改革をどうするかといっても、なかなか話が通じないところがあります。それから50%ちかくの学生達が進学してくるということになれば、それぞれの大学は質的にもうそれは千差万別でありますから、こちらで問題であることが、むこうにとってはひとつも問題ではないということが起こるわけです。どうしても共通の土俵を作る必要があるわけです。その土俵作りのためには、何が必要なのでしょう。たとえば、「大学はどのような人間の育成を目指すのか」というような点で共通理解が成り立つかどうか、というのがひとつの試金石だと思います。今日のお話をお聞きしたら、だいたいその共通理解ができてきたというような感じがいたします。

端的に言いますと、例えばマックス・ウェーバーの言葉を使いますと、「ハート」あるいは「ヘルツ」。ハートのない専門人という言葉がどこかに出てきていましたけれども、ハートを作っていくという仕事が非常に大事だという点で、たぶん共通理解があるという気がします。そのハートのところに、例えば岡田先生は「人間性」という言葉を使われましたし、他の先生はもっと別の言葉を使っておられます。それから、「ただの一般教育という言葉はもう死んだ」というふうに寺崎先生は言われましたけれども、岡田先生は「高度一般教育」という言葉を使っておられますので、たぶんそのへんのところにも共通点があるんだろうという感じがしています。

そうしますと、論議は実はこれから先はもうたとえば、僕らのセンターの問題になります。これまでの議論からいくつか問題を受けとめたのですけれど、これらは実際には僕らが今後センターで考えていくべき問題なのかもしれません。例えば、ハートのある専門人を作っていくためには具体的にどうしたらいいのかという、具体的なイメージのところまでおりてきますと、寺崎先生のイメージされていることと岡田先生のイメージされていることは、どうも違うように僕には思われます。具体化していくと、ずいぶん差があるような気がします。この点も含めて、今後考えてみましょう。これに関連して、松井先生は「ハルツンク（態度）」という言葉をしめされましたし、中村さんも「エートス」という言葉を使われました。とすれば、ハートのある専門人を作っていくというのは、技術の問題じゃないのかもしれないですね。技術以前の問題だったり、あるいは技術以後の問題であったりするかもしれない。こういう展望は示していただいたような感じがしています。

最後に、ずっと僕の引っかかっている問題があります。それは、本当に大学は専門人を育成してるのか、という問題です。企業の話が何回もでしたが、企業は大学が専門人を育成してくれることを、戦後一貫して要求したことなんかないんじゃないかという気が、実はしてます。そんな意味で、本当にハートのある専門人を育成していくという時に、専門教育の方を、実際のところ大学はどのように担ってきたのかという問題が、実際は背後にあるんだと思います。この問題も考えていく必要があるだろうという感じがしています。全部僕らセンターの宿題でもあるというふうに受け止めます。

（梶田教授）

ありがとうございました。それでは他の方いかがでしょうか。どうぞご発言のある方。

(伊藤秀子先生)(放送教育開発センター助教授)

放送教育開発センターの伊藤と申します。3人の先生のご講演たいへん興味深く拝聴させていただきました。それで私の質問は、先生方のおっしゃった「これからどういう人間を育成するか」というその理念的なことに対して、具体的にどのようにしていくのかという点を伺いたいと思います。

ちょっとわき道にそれますが、私は今放送教育開発センターの方で大学の授業改善というプロジェクトを担当しておりまして、全国の大学の先生方の具体的な取り組みについて、いろいろ全国から集まっていただきまして共同研究をやっている者なんですけれども、そういう具体的な取り組みについて考えている時に、どうしても理念的なことを忘れてしまう。忘れるわけではないんですけれども、ちょっと疎かになってきたということがございまして、そういう中で、その理念と具体的方法をつなぐという。そういう意味で、今日のお話はたいへん、私どものまだやっていないところをやっていたように思うんですが、その理念と具体的方法をつなぐという意味で、3人の先生方に、先生方が理想とされる育成の目標を達成するために、実際に実践していらっしゃる例を簡単にお話いただけたらと思うんですが。麻生先生のご提案は、先生ご自身がやってらっしゃるかどうかはわかりませんが、また放送大学では違うかもしれませんが、これまでに先生が実践された例なども簡単に伺いたいのですが。

(梶田教授)

今の問題で、もし関連してご発言がフロアーの方からあればと思いますが。よろしいでしょうか。それでは簡単に岡田先生の方から。

(岡田センター長)

どういう具合にお答えしていいかははっきりいたしません、実は先ほど必ずしも十分にお話できていないことがあります、それは大学の教養教育の改善ということを考えます際も、結局のところは、人と人とのつながりといいますか、人格的な交わりといいますか、要するに人格的な出会いというようなものが、やっぱり最終的には決め手になるんだろうと思います。ですから、いわゆる知育の場面で、教場の中での知的教授場面だけの教授法をいくらエラボレートしてみても、結局それは、まだ画竜点睛を欠いてしまうことになると思うんですね。そういう意味で、私は先ほどもちょっと触れましたが、大学のキャンパス・ライフの全体の中で、どのように先生達と学生達との本当のパーソナルなコンタクトが実現されていくのか、その工夫をいろいろしていくべきではないだろうかということを提案したわけでありまして。そういうものを全体としてシステム化していくことが、今後の課題となるのではないのでしょうか。それはスクール・ビルディングの問題も含めて、そして、いわゆるエクストラ・カリキュラ・アクティビティズといわれるようなものも、さらには、いわゆるエクспリシットではない、ヒドゥン・カリキュラムの面まで含めてのシステム化であります。このようなことを、本気で考えていくべきではないでしょうか。

そのための具体的な手始めとしては、私はスモール・グループをどのように形成していくのが大切になると思っています。先ほどチュートリアル・システムの話も出てまいりましたが、本当に一対一のオックス・ブリッジでやっている、ああいうチュートリアルは無理かもしれませんが、いずれにしても、小グループによる教授-学習を本当にきめ細かく工夫していくことが必要でありましょう。また、今までのクラス担任制などを考えてみますと、本当に名ばかりのもので、せいぜい年に2回ほど学生さんと会食するぐらいで、担任として必要な時といえば、要するに川端署に貰い下げに行く時だけというような、こういう教師と学生との稀薄な人間関係の状況は、本当に打破されていかねばならないだろうと思います。

いわゆる教授法の開発をすべきセンターの長として言う、ちょっと誤解を受ける惧れもあるかも知れませんが、私はいわゆる細まごまとした教授法についても、単なる教室内での事柄というスタンスで考えるよりは、先ほど申しましたような人間同士の、よりマチュア-な教師とより若い学生さんが本当に人格的に切り結びあうような、そういう関係をきめ細かく築き上げてゆく工夫・努力をしていくべきであろうと考えています。そのためには、大学人が本気で心身両面でのエネルギーと時間とを本当に投入しないと、若い人は育ってゆかないんじゃないでしょうか。本当に「人を育てる」ということは、ものすごくエネルギーのいることだと承知しております。今までの私の30数年間の大学人としての生活の中でも、そのことは十分に確信をもって云い得るところであります。根本的には、そういう営みを営々と、孜々として日常的な教授活動の中で積み上げていく以外に、ちょっと手がないんじゃないかと覚悟

しています。それこそが、先ほどコメンテーターの中村先生もおっしゃったような、企業体ならぬ大学独自の「エートス」を育てていく所以でもあろうかと考えているところです。具体的なお話になったかどうか分かりませんが、私は全体として、そういう方向で考えてまいりたいと思っております。

（麻生教授）

私は今放送大学におりまして、放送大学というのは教養学部ですから、教養学部しかないわけですから、放送大学で感じるのは、教養といっても、いろいろな年齢やなんかによってずいぶん違うということですね。放送大学の人はもう40や50。同じ源氏物語を読んでも全然受けとり方が違うんですね。例えば学生の頃、18歳や19歳で読む感動とかね、受け取り方に比べて。それで私が一番苦労しているのは、放送大学というのは中卒で入れるんです。中卒で大検受けないで入れるんです。それで中で一定単位とれば高卒と同じになりますから、4年で卒業できるんです。それで卒業には、卒業検定試験、卒研というのを書かせるんですけどね、やっぱり僕が一番苦労しているのは、中卒で来た人に関して卒研を書かせるということですね。北海道から原野を切り開いて、牛は家にいたことがあるけど本1冊もあつたことないなんていうような若者が来て、それに論文を書かせる。自分史みたいな卒論を書かせようと思って、エリクソンかなんか読ませますとね、basic trust vs mistrust がでてきて、自分の親は自分が6年の時に男といっしょに逃げてしまって、私は basic trust か mistrust か迷ってるんですよ。というようなことをのべる。今年は書けなかったんですけども。そういう若者にとって教養、一般教養というのは何なのかというと、やっぱりそういう人々には、生きるパワーになるような教養というのが大事だと思います。だからあまりきれいな事は言えないんですよ。「人類益」なんて言ったってしょうがない。そんなことを言っただけは悪いですけどもね。もっと自分がしたたかに生きていける教養というのがなあ。そんなものも大事だと思います。あまりきれいな事は言ってもだめじゃないかと。僕は人間があまり真面目じゃないもんですから。少しぐらいだらだらしても、なんかやっていける力を授けたいというか、いっしょに生みたいというか。今私の持っている人でも未婚の母が二人ぐらいいるんですけども、そういう人々にとって、一体、教養とは何かとかね。そんなことを考えていって、やっぱり国民のこの Cultural Literacy としての教養とは何なのかといういうようなことを、もっと生き生きと考えていきたいと思っているんですが。もう定年なもんですから、後2、3年で死ねば真面目にやったと思いますので、後長生きして5年くらい生きていれば、あまり真面目にやらなかったというふうに判断していただきたいと思います。それが私と放送大学に関して。

大阪大学とか、そういうところにいた経験ですと、僕が一番問題とみているのは、下の段階との関係ですね。今6・3・3の3・3というのが、あれが3年、3年できられてましてね。大学生でもほとんど高校で本を読んで来ないんですよ。この間の何新聞かの調査によると、ほとんど1年間本を読んでない高校生が8割越えるんじゃないんですか。読んでないんですよ。それで阪大に来て何を読んでいるかという、林真理子かなんか読んでるんですね。全然本を読んでない。それで学校教育法には、中学校は中等普通教育をやると書いてあるんですね。それから高等学校というのは知らなかったんですけども、高等普通教育をやると書いてあるんですね、学校教育法にはちゃんと。高等普通教育とは何なのかという一体、あれはなんだ。今までの一般教育というのは高等普通教育じゃなかったのかな、なんて思うんですけどちゃんと書いてあるんですよ。その上に、大学の教育がのるわけでしょう。だから、放送大学のような生活のかかっている人々にとっての一般教養と、そういう6・3・3の柱を登ってきて、本をほとんど読んでないという人にとっての、教養教育とは何なのかといういうようなことを今考えているんですけどね、結論はうまく出せません。

だけど僕はやっぱり、いろいろな大学でいろいろな教養教育をやっていると思うし、そこでなんか全てが解決するなんていうことは、とうてい期待はできないという気がいたします。

むしろ僕は大学改革も大事だけど、やっぱり日本の学制というのはそろそろ考えてもいいと思うんですね。3・3というのはどうしても上手くいかないと思うんですよ。3年というのは、スキッピングするのにも2年でしょ。2年でやったらちょっとしんどいんですよ。4年あればできますけどね。だから4・4・4ぐらいにしてやった方がいいんじゃないかと。大学改革も含めて、学制改革というのをいっぺんやってごらんないかと。なぜならば、今の大学改革とかなんかいうのは、表向きの理由はきれいごとを言いますよ。だけど基本的に何かというと、結局子供の人口が減っていくわけでしょう、若年齢人口が。それに対する過剰教育資源の確保策なんですよ、ほとんどが。そう

でしょう。大学だって大学院重点化。あれはやっぱり大学をベビーブームの時に増やした、その資源をいかに確保するかということでしょう。だから日本の大学というのは、常に改革というのは、昇格運動と膨張なんですよ。本当は膨張の時期じゃないんだけど、基本的にはそういう形をとる。それから高等学校だって総合学科作るでしょう。あれもやっぱりね、農業の先生なんかを救わなきゃいけないんですよ。守らなきゃいけない。今日本の教育産業というのは、全体としてエントレンチメントなんですね。縮小なんですよ。縮小の計画なんですよ。だから文部省行って文句言っても、「先生そんなこと言うけど実は、大学の先生の首をいかに切らないか、高等学校の先生の首をいかに切らないか」と言われるとね、こっちも「お世話になります。申し訳ございません」と言わざるを得ない。だからそれだったら、僕は思いきり学制改革をやって、資源が比較的、相対的につまり、教育の対象に対して教育の資源が豊かなときに、学制改革を思いきってやって、そしてすっきりとしてやった方が、僕はいいんじゃないかと思います。だからしんどいかもしれないけれど、ここでひとがんばりしてやるというのも、必要じゃないかなという気がするんです。じゃないとどうしても、教育人口の縮小期の教育改革というのは、なんかやっぱり元気がないし、表の理念と裏の計算が非常に違うんですよ。本当のことを言うと。そのへんをすっきり見てね、僕は思いきって学制改革をやって、日本の教育というものをすっきりしていくのがいいと思うんですけど。もう少し若い世代の人が、そのくらいのことを考えていただきたいと思いますね。僕は3・3というのはね、総合学科作ってもだめだし、それでそうかといって3・3をくっつけて、6年制を作って才能教育をやってみるというのも、なんかおかしいですしね。そのへんを考えるんです。

(梶田教授)

どうもありがとうございました。じゃあ寺崎先生お願いします。

(寺崎教授)

何か工夫をやっているかということですが、身近なところから言いますと、ずっとやってきた日本教育史の授業で、たったひとつ守ってきたことがあるんです。それは「一授業一資料方式」といえばいいでしょうか。一回の講義に一つの資料を選ぶんですね。何年かの間に変えることもありますけど。多くは文書資料で、絵図ならもっといいんですけどね。その資料に講義の焦点が全部集まり、またそこから全体が流れ出るような資料を作ってタイミングを考えて配る。講義をそこに焦点づけるようにする。これはわりに安心できる方法です。私語がものすごく減ります。時には当てて読ませたりしますから、学生の方では油断ならないと思っている。私は小学校の社会科の教科書の監修者をやってきました。その作業から学んだ方法です。焦点になる教材を決める。

もう一つあげますと、私は今、教職課程の教授です。教員免許法が変わって、「特別教育活動の研究」というのが必修になりました。そこでどの大学でも、クラブ活動の意義とか、いろいろなことを半年ぐらい、専門家を招んで話をしてもらったりしておられる。この科目の運営について、立教大学の教職課程では、一工夫しております。それは一言でいえば、坐学をやめよう、という方式です。学生には、ボランティアをやってみる学生、レクリエーション指導を志望する学生、キャンプを指導する学生、こういうふうに登録させまして、おのおのの活動をするよう大学でも準備する。一回だけ教員の誰かが講義しますけれども、それはほんのイントロダクションです。これはいいですね。実際学生達はまじめにそれぞれの活動をします。もちろん、ボランティアを単位にすると何事だという批評もあるんですけど、やっておりますと、やっぱり学生は変わってきます。考えてみると、教育実習でも2週間行ってあれだけみんな奥深い顔になって帰ってくるんですから、半年間の身体をつかった活動は大きいはずですよ。やっぱり、ある新しい関係の中に学生達を置くことが大事なんだと、このごろ私は痛感いたしております。

もうひとつ、これは岡田先生と大いに違うんですが、先ほど、技術の revolution については全然評価しないとおっしゃってましたが、私はそれはとんでもない間違いではないかと思うんですね。私は、技術は elaborate しなくちゃいけないと思うんです。というのは、教育学者の立場からの主張ですが、私は大学での授業の中に、小中学校で作られてきた技術をもっと導入してもらう必要があると思うんです。例えば発問、質問の仕方。これだけについても、明治以来どれだけの日本の小学校の先生が考察と工夫を重ねてきたか。先ほど申しましたMITで教えているというあの先生は、次のようなことを書いておられます。いすを作る設計をやるとしても、自分はその問い方に気をつけて

いる。「椅子とは何か」というふうに名詞として問う時と、「座るといえることはどういうことか」と動詞として問う時と、この二つでは答えの深まりが違って来る。動詞として聞く方がいいんだと。そうすると学生のイメージがドッとわいてくる。こんなことは、小学校の先生方は、昔から言ってきたわけですよ。そういう技法を大学の中に、もっと、あれもなく持ち込んでいいんじゃないかと思います。

最後に、放送教育開発センターで、先生方集まっていたいて研究してるとおっしゃったんですが、それは古いんじゃないんでしょうか。大学に行かれたらいいと思います。今どの大学も授業参観をほとんど拒否しません。授業を見るんです。その方が、意味があると思います。

(梶田教授)

どうもありがとうございました。伊藤先生からの投げ掛けで、いろいろな視点に立った発言が聞けたように思います。他に。じゃあ。

..... ◇

(岡本先生)(大阪国際大学政経学部)

大阪国際大学という比較的新しくて、しかも2学部しかない小規模な大学であります、今日は私の期待以上にいろいろな示唆をいただけるセミナーで、大変有益でありました。

3人の先生方、それから討論の先生方も含めて、全くと言っていいほど触れられなかった問題がひとつあると思います。それは、岡田先生の問題提起で言いますと、「人類益」、それを目指すものとして今、21世紀の大学の教養教育を考える。同感なんですありますが、その場合に、人類という問題と民族の問題とをどのように調和させるのかという問題があります。これは今の、特に冷戦後の世界に起きておる大状況からいたしましても、これまで過去2、3世紀、普遍主義を掲げた近代西洋文明がずうっと広がっていく中で、その影響下に立たざるを得なかった世界の諸民族が、その吸収に努めると同時に、自らのアイデンティティを求めて民族文化というものの見直しを行ない自己主張をやる。それは世界的にいろいろな形で出てきているし、これからも私は重要なものであり続けるだろうと思います。植物にたとえば、「人類益」というきれいな花を咲かせる。これは大いに必要だと思うんですが、それを伝統文化という根っこと接続しないで、「人類益」の教養文化というもののだけを取り上げられると、実際の教育実践において、実はきれいな事で、教育効果が上がらなくなってしまいはしないだろうか。現実の問題としましても、国際化が進んだと言いますが、外国人の学生が多いところで1割、数パーセント、1%にも満たない。圧倒的多数は日本人である。日本人をどのようにして、この「人類益」に導いていくか。要するに、民族と人類のこの関わりですね。これを押さえておかないと、教育効果としてあまりいい結果をもたらさないんじゃないか、という気がいたしますが。

(梶田教授)

ありがとうございました。これはお答えいただくようなことじゃないと思いますので、他にありましたら。

河野先生(総合人間学部)

京都大学の中で最底辺で一般教育を担当させていただいております、総合人間学部の河野と申します。佐藤副学長も来ておられる中で言うのは少し勇気がいるんですけども、私自身は今日は敵情視察というつもりで来させていただいております。それで私は専攻は数学ですので、岡田先生とか他の方のような非常に広範囲な教養教育について何も見識ありませんので、寺崎先生に非常に単純明快な質問をさせていただきたいと思います。先生のお話は四角い丸をいかに美しく書くかと、そういうお話ではないかと思うんですが、いかがでしょうか。

(梶田教授)

もし寺崎先生、何か一言あれば。

(寺崎教授)

四角い丸を美しく書いたら、四角になるんじゃないですかね。もうちょっとわかるように教えてください。数学的教養に関しては、僕は最底辺におります。よろしく。

(河野先生)

今のお答えで非常に私はわかったんですけども、四角を専門教育と読み、丸を一般教養と読みますと、今の答えは非常に明快にわかったんですが、それでよろしいでしょうか。

(寺崎教授)

専門、一般と分けていうと、今まさにおっしゃったとおりじゃないでしょうか。つまり、私の主張、今日言った専門も一般教育になりうるという主張は、実際的には教養教育もまた専門教育になる可能性を、少なくとも論理的にも、実体的にも含んでいます。その次に、じゃあ今の専門教育に対して何を言えるかという、そこを言わないといけないんですが、私も今、そこまでは言う自信がありません。

(河野先生)

じゃあ制度的に一言で言わせていただきますと、これは実は佐藤先生にお聞ききいただきたいという感じで言うんですけども、要するに専門学部、専門学部の一般教養部化ではないかと。要するに、学部の教養部化ではないか、というふうに私は思うんですけども、そういうふうに理解してもよろしいでしょうか。

(寺崎教授)

それは私の考えと近いです。非常に近い。つまり、リベラルアーツカレッジのモデルというのが僕の中にあります。これを入れきれなかったのが、日本の大学に50年前の無理をもたらしたんじゃないかと、今にして思いますね。

(梶田教授)

残念なことに、もう時間がきてしまいました。どうしてもという方、後お一人だけお願いしたいと思います。

(笹山先生)(大阪府立看護大学医療技術短期大学)

どうしても言いたいというのが、ひとつあります。

それは今日の発表者とコメンテーターの方々の経歴を見ればわかるように、中央の大きい大学の経験者ないしは外国の経験者であって、多少私立大学にも行かれています。しかし日本の大学のほとんどは地方にあって、しかも小規模な大学がほとんどであります。私のところも地方にあって、そして非常に小規模な公立の大学です。こういう大学の声を反映するような形でフォーラムが開けないものだろうか。そういうことがひとつあります。

それから内容に関しましては、先ほど松井先生やその他の方もおっしゃっていましたが、教育することを評価するというのをきっちりとやっておかないと、我々教員の側が研究業績を中心にしてしか評価されておきませんので。それが教育にエネルギーを使うということを、どうやって評価してくれるのかという。そのところのシステムを十分考えておかないと、これは教師を教養教育に向かわせられないんじゃないかと思うことがあります。

それから、専門教育と教養教育とを分けるということに関しまして、栗本さんの方から、経済学を教えるということの中で、経済倫理をそのまま教えられないかというような、そういう指摘があったように思いますが。その専門教育の中に教養教育にあたる、この基本になることをいっしょに入れられないだろうか。例えば医学。私のところは医療系の大学なんですけれども、医療教育をやる中で、当然「医療概論」というようなもので「医療哲学」をやらざるをえないわけです。その中で、当然ながら人間教育というものに入ってくるわけですから、「概論」をもう少し工夫することによって、教養教育の方向に行けないだろうか、私なんかはそういう具合に思っております。有り難うございました。

（梶田教授）

申し訳ありません。時間がだいぶ過ぎてしまいました。最後に岡田先生の方から、先ほどから出てる問題について若干ご発言したいということですので、ちょっとだけご発言をお願いします。

（岡田センター長）

いま笹山先生から最後に提起していただいた点に関して、まずお答えしたいと思います。実は先ほど私が発表しました中で、平成5年度から京都大学が新しい試みとしてやっております「高度一般教育」について説明しておきましたが、これこそ正に各専門分野ごとの先生方がチャレンジする教養教育の試みであります。ですから同じ趣旨、同じ方向で、いろいろな大学で模索されているんだなあと、感慨ぶかく承りましたし、また栗本先生の先刻のご発言も、そのような向きで私は受け止めております。

それから、先ほど寺崎先生は、岡田が教授法の細まごましたことは要らないと言ったかのようにおっしゃったんですが、私の発言の趣旨は、決してそうではありません。舌足らずの言い方をして誤解を招いたとすれば、ぜひ解いて頂きたいので少し申し添えます。私は、大学でも教授法は非常に大切だと思っております。だからこそ、本センターも設立されたわけで、初等・中等教育段階でのティーチング・メソッドは、非常に素晴らしいものがあるので大いに学びとるべきであります。ただそれを、そのまま大学で、それだけやっていけばいいかといえば、そうではない。大学としては、先ほどご紹介がありましたような、個々の教授方法や教授技術の細目の背景にある、いろいろ重要な人間学的問題をもう一度自覚的に浚いだして把握し直す必要がある。そういう際の究極的なスタンスとして、私は先ほども申し上げましたように、「最後の決め手」となるのはやっぱり人と人との関わり合いだということを、申し上げたかったわけであります。

そこで、この「人格的関わり」ということと関わらせて、もう一言だけ。先ほど松井先生の方から学ぶ者の“Haltung”を変える必要があるというお話がございました。これは非常に重要なことだと思います。ハルトゥンクを変えることで、自発的・主体的にどんどん自己発見的な学習が進むことになるわけですが、ハルトゥンクを変えるためには、何らかの意味でのショックを与えないといけないわけですね。それには、怒鳴りつけたり、強要したりしてよいわけでは決してございません。私が提案したいのは、人と人との具体的な人格的関わりの中で、ただの生活べったりの、オーディナリーなレベルでの日常の次元を何らかの意味で突破させることです。その魅力といいましょうか、その輝かしさ、その香わしさ、その高さを学生さん達に、本当に感得させてあげたい。一旦日常性を超越したところから、もう一度現実に立ち戻った時、日常は全く違った意味を帯びてくる。それが、麻生先生の説かれた本当に人生を生き抜いてゆく「たくましさ」というようなものにも、結局はつながってくると思うんですね。そういう意味で、私は学生さん達に日常性の次元をどういう具合に突破させるのか——そのことに、教師は本腰を入れて腐心すべきであろうと考えております。日常性を突き破るような知的・道徳的・美的な体験を持つことは、やがて「人類益」というような問題に大きく眼を開き、高く広い視野から実践的・建設的にそれを考えることにもつながっていくんじゃないでしょうか。そうした脈絡で考えておりますことだけ、付け加えさせていただきました。

（梶田教授）

本当は、ここで最後に私が5分か10分総括をすることになっています。しかし時間が予定を過ぎていますので、これはやめます。今日6人の先生方からプレゼンテーションしていただきまして、極めて多様な視点が出されました。

私は実をいうと、今の大学教育改革の状況においては、極めて多様な視点が出てくること自体が意味を持つというふうに思っております。明治の初年に、京都でいうと同志社ができたり、官立でいうと東京大学ができたり、そういう近代の西洋風の大学の創設期がありました。そして戦後、アメリカ占領軍の指導があって新制大学ができました。高等教育の仕組みをアメリカモデルにかなり強引に変えざるをえなかったわけです。そこで教養教育なんかも、木に竹を接ぐような形で入ってきたという面があります。そして大学設置基準の大綱化以降、新新制大学の時代が始まったと私は考えております。3番目の大きな高等教育改革の時代が始まっているわけです。この特徴は何かと言いますと、「何でもあり」です。大綱化ですから、いろいろなことが可能です。少なくとも多様化・個性化に向かう道が開けたと思います。もちろんこのままで十分だとは思いません。大学教員の方々の意識の問題もあります。施設設備の

問題もあります。もっと言うと、財源の問題があります。いろいろと障害がありまして、何でもかなうとは言えません。しかし新しい時代の、新新制の大学作りというのは、結局は国家主導でもなければ、あるいはどこかにカッコリとしたモデルがあるわけでもありません。それぞれの大学を構成する大学人のアイデアを生かし、願いをこめて、その大学らしい個性的な、多様化をはかっていくべきだろうと思います。そういう時代が今来ているのではないかと思われてなりません。

そういう意味で、今日の6人の先生方の多様な視点からのプレゼンテーションを受け止めていただければ、非常に有り難いと思います。本当に今日は有り難うございました。最後に私どものセンター長、岡田先生から締めくくりのご挨拶をいただきたいと思います。